原風景を求めて —自然環境との共生とアメニティへの配慮—

井 本 由 之 *

1. はじめに

「玉かつま島熊山の夕暮れに、ひとりか君が山道越ゆらん」(万葉集 12 巻)

特別養護老人ホーム豊中グリーンヒルの設計にあたっては、万葉集にも詠まれたこの敷地のある島熊山の保全と深い関わりあいをもっている。計画において意図されたのは、この都市に残る自然をどのようにして、建築やそこで生活する人々と共生させてゆくのか。また、ここに住まう高齢者がいかに生き生きと生活し、近隣住民共々、真のアメニティを享受する事が出来るのかであった。

2. 地域・敷地の特性——原風景を求めて

この豊中グリーンヒルのある豊中市は大阪のベッドタウンとして、高度経済成長時、急速に宅地開発が進められた地域である。敷地は大阪平野北部、かつての江坂の渚より始まる千里丘陵の中央に位置し、この島熊山から千里山にかけて寝山と言われる尾根が低く連なる場であった。

写真1の航空写真のように、宅地化がかなり進んでいるが、尾根沿いに千里緑地として、かろうじて雑木林が残りつつ、地下鉄千里中央駅から徒歩で10分という近距離にあり、姥捨て山ではない、理想的な立地である。

この島熊山は、コナラを中心とした照葉樹林帯に属し、近隣の自然保護団体がおこなった方形枠調査、ベルト調査によると、コナラ、ソヨゴ、ヤマハゼ、ヤマザクラ、アラカシ、ヤマモモ、アカマツ、クロマツ、クヌギ、コバノミツバツツジ、シュンラン、ヒメヤブラン、オカトラノオ、コウヤボウキなどが認められる。

原生林というより、里山の景観を有するこの付近は、

写真1 5年毎の定点観測写真

かつては沢沿いに水田が段状に連なる風景と思われ、その名残りとして、敷地内の池には堤の痕跡があり、溜め池として機能していたと推測される。堰板は今はなく、そのため水深1メートルにも満たない水溜りのような池から流れでる水は、すぐ下の、過去に水田であった平地を湿地と化して、小生熊系が形づくられる。ハラビロトンボ、チョウトンボ、ツバメシジミ、クマゼミ、ミンミンゼミなどが生息し、鳥類はイカル、モズ、シジュウカラ、コゲラ、エナガ、ホオジロ、メジロ、ウグイスが見うけられる。

地質の面からは、古い地層である神戸層群が露出していて、他にはない興味深いところである。

太古の時代、この千里丘陵ではナウマン象が往来し、^{ヤマト}八百万の神が住まわれた。時代と共に、神々の棲家は狭められ、現在わずかに島熊山付近に住まわれる。

3. 計画の展開

ボーリングに依る地質・水位の調査、自然保護団体からの植生調査資料、樹種とその大きさもプロットした精密な測量図などを使い、自然観察と並行して、インセクトアイの気持ちでこの土地固有の相を読みとって計画を進めている。以下の小節は都合上、分けて記

* ㈱環境開発研究所
Yoshiyuki IMOTO

述しているが、諸テーマは重層的に絡み合っている。

3. 1 水脈、生態系の保全——自然環境との共生

この敷地の最大の特質は、里山的とはいえ、寝山のスカイラインと雑木林としての原風景を保っている事であり、この小生態系を成り立たせているのは沢沿いの水脈である。配置計画は、この水脈を分断しないように沢沿いを避け、過去道路造成の際にできた斜面（芝生と赤松が植林されていたが大半は枯れていた）の側にずらし、道路に沿った曲面を持つリニアなプランとした（図-1）。さらに地下水系を乱さないように、基礎底盤を常水位より高い位置に設定している。土工事では通常のオープンカット工法をやめて、植生を保全し、図-1のように建物と重なる部分の樹木はコナラ・ソヨゴを中心に可能な限り移植した（図-1の○印の部分）。その移植先でも生態系・密度を崩さないように、枯れ木などのところに入れて、修復を行っている。また道路沿いの新たな植樹では、この土地の樹種を選定している。共生のシンボルとして、彫刻家山本哲三氏の作に依る風神・雷神が、雑木林と建築のはざまに守護神のように立ち、両者を結びつける。この自然神達は、春分と秋分の正午に自らの影を下面の石板に寸分たがわず重ね合わせ、天の運行をしらしめる（写真2）。

3. 2 景観面からの配慮

建物を島熊山の斜面に沿ってスライドさせる事で、

写真2 自然と建築の媒体になる自然神

図-2 初期イメージスケッチ

地形をなるべく崩さず、道路からの高さも抑えられ、圧迫感を与えない（図-2）（写真3）（写真4）。

これにより全階、接地階となる事で避難上の安全性も計っている。地域の色は、その土地の土の色に支配

図-1 樹木をプロットした測量図

写真3 建物全体模型

道路と森を建築が遮断しないようにピロティを設け、屋上は盆踊りなどのお祭り広場や避難救急基地としても活用される。

写真4 建物外観

道路に沿って、曲面は柔らかな印象を与える。

写真5 CGシミュレーション

される。周囲に溶け込むように、神戸層群の土を数点サンプリングして、外壁色としている。

またコンピューターグラフィックスを援用して、景観のシミュレーションをしつつ（写真5）海拔120Mの島熊山より高くならないように、階高・基準GLを慎重に設定して、千里中央から見るこの山並のスカイラインを保全し、同時にこの生活の場を街の喧噪から守っている。（図-3）

3. 3 高齢者の自立とアメニティ

特別養護老人ホームは、ほとんどの入居者にとって、死ぬまで暮らす人生最後の生活の場となる。だからこそ、入居者が前向きに生きていけるような施設にしたかった。高齢者が陥りやすい「寝たきり」や「痴呆」の発生を防止し、進行を抑えるためにも、安全性や介護のしやすさは当然の事として、アメニティを前面に打ち出し、入居者達が自分の意志で動きたくなるような施設を、である。

ここは全体を“街”というコンセプトで設計している。二棟のうち南棟を南街、北棟を北街と名づけ、北街は居室を配した住宅街、南街はレストランや風呂屋、売店などがある繁華街という設定にした。それは住居から街へ行くというウキウキした気分が、外へ出てゆく動機づけになるからだ。街路をイメージした廊下には所々にベンチのある溜まり場があり、そこで談話を楽しめる。また数ヶ所に神棚や仏像、地蔵、十字架を設置し、施設内で“お参り”もできる。どこへでも自力で積極的に行けるよう、段差をなくし、連続する手摺を設けたバリアフリーのデザインは徹底している。居室では、快適性確保のためプライバシーへの配慮を重視し、四人部屋では家具を利用して、個人スペースを区切り、視線からさりげなくプライバシーを確保している（写真6）。

図-3 南北断面図

日溜りのようにポッカリと静謐な空間が成立する。

写真6 四人居室

障子を通して柔らかな光と共に森の声が聞こえ、家具に付属したキャスター付きの折りたたみ戸が時に応じてプライベートな空間をつくる。

写真7 中庭

森のささやきが入ってくる。

また環境を享受できる真のアメニティとは、視覚的なものばかりではなく、より根元的なレベルの感覚まで動員しなければ、総体としての環境は味わえないものとして、風の通る道やサウンドスケープを考慮して

いる。好ましくない騒音は遮断して、静寂な中庭を確保し、その空中を、音の原風景である森のアニマ達のささやきが、カーブした壁にバウンドしながら突き抜ける(図-4、5)(写真7)(写真8)。夜には森の

図-4 ピロティ断面

ロキやアニマ達の気配が忍び出る。

図-5 中庭平面

好ましいノイズがバウンドしながら奥まで入り込む。

写真8 森と一体になるレストラン

写真9 エントランスピロティ

しじまが、この世界を支配する。また森の神々の気配が街路へ忍び出て行くように、エントランスピロティを設け、道行く人々が四季の移ろいや、雰囲気を楽しむ（写真9）。

3. 4 地域特性の記録の保存

神戸層群の掘削時期に、地質関係者の見学会を催し、この時の資料を基に、豊中市生物同好会の協力を得て、地域の記憶として、記録とサンプルをロビーに永久展示している（写真10）（写真11）。

写真10 神戸層群見学会

写真11 展示ケース

4. お わ り に

万物すべてが、魂を持つ事で人間と同等のものであり、互いに敬い恐れと親しみをもってつき合ってゆくアニミズムの心こそ、宇宙船地球号の中で共生してゆくルールになるのではないだろうか。

生き物としての人間は、2～3百万種ともいう生命体のその一種にすぎない新参者なのだから。

私は中心のない、自然のもつ呼吸に合った建築、深い大気の中に溶け込んでゆく建築を造りたいと考えている。